片岡 佑輔（理科教育コース）

子どもの将来のために

１．教育を考える一言

今だけかわいがることはできる。でも、それが本当に将来のためになるのだろうか

２．背景

この言葉は、作家の乙武洋匡さんが小学生だった頃の担任である高木悦男先生の言葉です。高木先生は乙武さんに対して、「校舎の中はもちろん、校庭に出るときにも、電動車いすに乗ってはいけない、全部自分の足で移動しなさい」と言いました。そのため、乙武さんは、校舎の中も、校庭に出た時も、おしりを引きずるようにして、人よりも何倍も時間をかけながら、ずりずりと歩くようにしていました。助けようとする子ども達もいましたが、高木先生は「乙武君には、自分で出来ることは自分でさせましょう」と言い、厳しく手伝う事を禁じました。そして、真冬は校庭がものすごく冷たくなっており、ズボン一枚を隔てて地べたに座っている状態のため、おしりが凍り付くんじゃないかと思うぐらい冷たい思いをしていました。そういう乙武さんの姿をみかねた他のクラスの先生が、「さすがにかわいそうだから、せめて真冬だけでも、乙武君を車いすに乗せてあげたらどうですか」と高木先生に言いました。しかし、それに対して高木先生は「今だけかわいがることはできる。でも、それが本当に将来のためになるのだろうか」と言いました。

３．考察

私は、筑波大学に入学する前に、集団指導塾で小・中学生に理科を教えていました。そして、志望校に合格する事ができるようにするために、次のような指導を行っていました。

１．教える内容を受験に出題されるものに絞り、それらを丁寧にわかりやすく教えた。

２．いつまでに、どの教材用いて、どのように学習を進めるかを詳しく指示した。

このような指導は、子ども達が志望校に合格するために役立ったと思います。しかし、ある日、塾を卒業した生徒達から、「高校に入って理科がわからなくなった。」という発言を聞きました。この発言がきっかけになり、私の指導は卒業後の子どもの事を考えていない、不十分なものだったのではないかと考えるようになりました。つまり、子ども達には、受験に出題される知識を教えるだけではなく、卒業した後に、自分自身の力で理科を学習するための自己学習力を身につけさせるべきであったと思いました。もちろん、高校生に対して、過剰に自己学習力を要求するのは行き過ぎであると思います。しかし、ある程度の自己学習力は高校生までに身につけさせておくべきではないでしょうか。このような経験をした私にとって、高木先生の言葉は、非常に身につまされるものでした。短期的な目標を達成するためでだけなく、子ども達の将来を考えた上で、今、どういう指導をするべきであるかを常に念頭において指導に当たるようにしたいです。

引用参考文献

乙武洋匡「仰げば尊し、心に残る恩師の言葉　わが師の恩」、『総合教育技術』小学館、2011 年